平成27年度　第1回　高知県子ども読書活動推進協議会

日時：平成27年12月7日（月）13：00～15：00
場所：高知県庁西庁舎　2階　教育委員室

1　開会
　高知県教育長挨拶

2　委員長及び副委員長選出
　委員長：渡邊　春美（高知大学教育学部教授、高知大学教育学部附属小学校長）
　副委員長：窪田　靖（土佐町教育長）

3　議事
（1）第三次高知県子ども読書活動推進計画策定について
【説明】
・第三次高知県子ども読書活動推進計画策定の趣旨
・策定作業のスケジュール
・策定検討にかかる論点案
【質疑・応答】
（委員）　策定のスケジュールに関して、パブリックコメントについて高知県教育委員会の中で集まり具合や集まらなかったときの改善策等、協議されていることがあれば教えていただきたい。
（事務局）　パブリックコメントについては、制度化されているものではないが、基本的に県民の意見をできるだけ聞いていこうという考え方の中で、県全体の計画をつくるときには行っている。どれだけのご意見が来るかについては、案件によってまちまちである。県民の皆さんの関心の深さや対立意見のあるような案件については比較的多く集まっているのではないか。データに基づいた回答ではないが、そのような感触を持っている。
　できるだけ多くのご意見をいただきたいという考えから広報、PRの方法についてはできる限りの機会を捉えてやらせていただいている。ご意見が多く集まらなかったので改めてもう1度行うということはない。募集期間を決め、その中でいただいた意見に対して、考え方を整理し、反映できるところは計画にも反映させている。いただいたご意見等はホームページ等で広報している。
（委員）　最近の記憶では新図書館の整備方法について、県全体で論議になったことが思い出深い。この第三次計画についても、委員としていかに周知し、集めていくのか考える必要があると改めて思う。
（委員長）　策定検討にかかる論点案の中で、国の大きな方向性として、学校だけではなく、地域、家庭等を含んだ総合的な取組が社会全体として必要であるということを言われた。しかも環境は大きく変わってきている。2045年問題のようなことも含め、IT化、ICT化等の現状も踏まえ、読書活動の推進というのはどういう意義があるかということも関連していくと思われる。
　社会全体での取組とは。環境の劇的な変化への対応策。読書活動の意義は共有されているのか。そういったことを大きな問題として、国の方も考えている。学力面、生活指導的な面、21世紀を見据えた教育の課題、今、学習指導要領の策定に向けて動いているが、そこで私たちが見据えていかなければならない人間像とそこに必要とされる資質や能力の関係等も出てきた。非常に大きな問題である。難しい面もあるが、第三次計画策定に向け、様々な意見をいただきたい。
（委員）　読書環境の変化について、電子図書について触れるとあるが、今、社会全体がペーパーレス化しており、新聞もスマホで読める。若いお母さん方の中には、家に本や雑誌が一冊もなくてもスマホで読めるというような時代になってきている。こういったペーパーレス化の中で、紙の本の良さを議論の中で考えていければと思う。インターネットが普及し始めた1990年代ころ、『インターネットは空っぽの洞窟』という本があり、“紙の本の良いところはお風呂に持っていけるところ”と書かれてあった。しかし、今はもう濡れても大丈夫なスマホも出てきている。これではもう言い訳も立たない。私たち

世代が受けてきたような本に対する特別な思いを次世代に継いでいけるような提案ができればと思う。

ペーパーレス化の中での読書活動の意義、紙の本を読む良さ、電子書籍とは別項を立てて考えなければいけない。

（委員）　今の時代、読書活動をどのように捉えるのかというのは非常に難しいと思う。参考資料５の１ヶ月に１冊の本も読まない子どもの割合があるが、高校生は、47%から 53%に、中学生は 13%が 16%に上がっている。しかし、彼らは本を１冊も読まないのではなく、ネットの世界で専門家の論考やエッセイ等を読んでいる。そこでたくさんの知識を得ている。この数値だけを取り出して子どもが本を読まなくなっている、ものを考えなくなっていると捉えるのは非常に危険である。読書活動というものを、どのように捉えるのかということを論議しておく必要があると思う。

2010 年頃、世界で発信される情報の単位はＺＢ（ゼタバイト＝１０^{21}）に突入したと言われた。つまり世界中の砂浜の砂の数ほどの情報が１年間に発信されていることになる。子どもたちはそういった情報の海の中にいるのである。そこをどのように捉えるのか。SNS の問題もある。様々な角度から本と読書活動、SNS の世界も含め、ネットで得る情報なども整理して考える必要がある。

（委員長）　ペーパーレス化の問題もあるが、根本的に読書活動をどのように見ていくのか検討する必要があるということか。

（委員）　読書というツールを使い、子どもたちにどのような力を育んでいくのかということが大事である。第二次計画には、考える力や表現力を身につけさせるとともに、人との絆を育んでいくという大きな目標がある。第三次計画を考えるときには、この目標でいいのかということも含め検討する必要があるのではないか。暴力行為等の問題、学力の問題、高知県の子どもたちの現状を踏まえたときに、このままでいいのか、それとも変えるのかによって今後の具体的な検討も取組も変わってくるのではないか。例えば目標を変えずに、その内容を検討していくのか、あるいは 30 年の学習指導要領の改訂やアクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメント等の考え方も踏まえて検討していくのか、さらに現在の教育課題を踏まえて検討していくのかによって今後の検討も違ってくるのではないか。事務局の方でイメージしていることがあれば伺いたい。

（事務局）　事務局として提案させていただいた論点で、あえて読書活動の意義ということを入れたのは、やはり教育委員会全体としても、学力や生徒指導上の問題など様々な問題がある中で、この読書という可能性について、ぜひ広げて周知をしていきたいという思いがあってのことである。ご指摘のように、どういった意義で捉えるかといったそもそもの意義の捉え直しという部分も含め議論していただきたいと思っている。

そういった意味で第２回協議会が一番自由が利く会だと思う。今日のご意見を踏まえ、必要な理論、検討事項等を委員長ともご相談させていただき準備をしたいと思っている。

（委員長）　読書の意義ということとの関連で、第二次計画の方針とも結びつけながら考えていく必要はあるだろうと思う。読書活動の意義と読書活動を推進する意義というのは同じか。

（事務局）　基本的には同じである。言葉の表現の問題である。

（委員長）　同じというのは読書活動自体の意義を論点として挙げているのか。推進する意義なのか。

（事務局）　後者と捉えている。本県の課題等も踏まえたうえで、推進する意義ということを考えていく必要があると考え提示させていただいた。

（委員長）　第二次計画の基本目標を第三次計画につなげていくときに、これをどう生かすのか、継承・発展させるのか、あるいはまた違った観点も入れるのか。また、読書の質を高めるとはどういうことなのかと思う。先ほどのゼタバイトのことなどを考えると、どうしても質というのは、やはり情報の処理に関わるメディアリテラシー等の観点が必要ではないかと思う。

（２）第二次計画の成果と課題について

【説明】

・第二次計画の成果と課題について

【質疑・応答】

（委員）　資料７、４Ｐの説明で、学校図書館の活用が国語科のみの活用になっていると言われたが、学校の実態としては、４年生では、社会科において歴史書を活用し高知県や高知市の学習をしている。高学年でも社会科では非常に図書の活用をしていると思うのだが、国語科のみでの活用が多いという結論はどこから出てきたのか。

（事務局）　この数値は全国学力・学習状況調査から出てきた数値である。学校図書館を活用した授業の実施は国語科が多く、ほかの教科ではなかなか使われていないと聞いている。

（委員）　社会科では教科書だけでは十分でなく、総合学習や人権学習においても非常に学校図書館を活用していると思う。国語よりも他の教科の方が、実態としては使われていると思うのだが、どのような調査から言えるのか。また、学校図書館や新聞等の活用が目的になってしまう授業が見受けられるというのは、どういうことか。

（事務局）　新聞を授業で使うということが授業の内容になってしまい、新聞をどう読み取っていくとか、それをどう発展していくかというところまでの授業になってないというのが見受けられたというふうに聞いている。

（委員）　そういう授業をたまたま見たのか、課題として挙げているからには、相当な数が必要ではないか。１、２度見ただけでは駄目ではないか。

（事務局）　確かに、推進校ではできている。しかし、他の学校を見たときに、なかなかそこまでできてなかったというのを聞いている。

（委員）　高知新聞も学校に入っている。この課題に挙がるほど学校図書館は使われていないのか。

（委員）　ことばの力育成プロジェクト推進事業の中で読書活動の充実ということを柱に据えており、推進校で、国語科が中心となるということは理解できる。しかし、この第二次計画に沿って取り組んでいるのは、推進校だけではないはずである。

（委員長）　第二次計画の具体的方策の中の推進校に限ったということか。

（事務局）　いいえ、推進校を中心に進めていきながら全体へ広めていくというように計画されている。

（委員長）　実感とデータとのずれがあるということである。

（委員）　学校図書館の組織的・計画的な活用について、先だって四万十市と土佐清水市で四国地区の研究大会が行われた。事例発表をするような優れた学校というのは、年間の教育計画や教育課程の中にしっかり学校図書館を位置づけて組織的に活動を展開していると感じた。推進校で加配教員だけが一生懸命取り組むとか、熱心な先生だけが取り組むのではなく、その仕組みやプラットフォームがしっかり学校の中に年度当初から、年間計画の中に位置づけられているということが見受けられた。今後は、学校図書館への学校司書の配置と学校図書館の組織的な活用が大事なポイントになってくると思う。第三次計画の策定にあたっては、この２つをどのように取り組んでいくのか、このHOWの部分を第二次計画よりも踏み込んだアクションプランにしなければいけないと思う。

（委員）　課題として「学校図書館を利用した授業の計画的実施」ということが挙げられているが、積極的に授業で図書館を利用した場合とそうでない場合では、学力差等は出ているのか。

（事務局）　それについては、資料等提示できるものはない。

（委員）　資料７、１Ｐの「乳幼児健診などにおける本と出会う場づくりの推進」のところで、ブックスタート事業が今100％の実施率とあるが、具体的にはどのようなことをされているのか。

（事務局）　もともとのブックスタート事業とは、乳幼児健診等の機会に親子で一緒に絵本を楽しむことの大切さを伝えながら絵本を手渡す運動である。絵本をプレゼントするということはできていない市町村もあるが、乳幼児健診等の場に市町村の図書館職員や読書活動担当職員、読書ボランティア等が出向き、読み聞かせとか本の大切さをお母さんと一緒にお話しする等の活動がなされている。実際、本をプレゼントしているところは 29 市町村。本のプレゼントはないが、関連事業はできているというのは 5 市町村となっている。

（委員）　事業自体は100％の実施率であるが、それを全員が受けているということではないのですね。

（事務局）　はい。乳幼児健診は対象者全員が受けているかというと、そうでもないと聞いている。市町村的に

は全市町村で行われているというところである。

（委員）　資料７、10Ｐの文部科学省大臣表彰のところで、「文部科学大臣表彰の水準に達する被推薦学校、図書館、団体、各個人の情報収集の方法を検討する必要がある」というのは、水準に達する情報の収集方法が確立できてないということか。

（事務局）　推薦基準があり、それを満たす学校等の情報というのがなかなか集めにくい、集まらないということがある。その周知方法を検討する必要があるということである。

（委員）　水準に達するところを探すことに苦労をしている、苦労したという捉えで構わないのか。

（事務局）　はい。

（委員）　学校図書館協議会の方に声をかけていただければと思う。連携をしていきましょう。

（委員）　資料７、７Ｐに特別支援学校の公立図書館等との連携・交流されている割合が大変増えているとあるが、課題として『子どもの実態に合わせて行うため、年度によって利用のばらつきがある』とある。実態に合わせて行うのは当然のことであり、課題ではないと思われる。再検討いただきたい。

（事務局）　分かりました。

（委員長）　資料６に関わり、特徴的なこと、例えばこういうことが問題であるというものはあるのか。

（事務局）　まず、９番である。学校図書館を活用した授業の計画的実施率は上がっていないということである。そして、19 番のデータベース化についても数値的に県としては伸びてきているが、全国平均に比べると伸びていない。そして、22 番。授業でインターネットを使ってグループで調べる活動をよくやっているかという質問についても、全国に比べると低い数値となっている。

資料５は、第二次計画の基本方針等の具体的な取組の概要版に沿って成果と課題をまとめたものである。Ｉの『自主的な活動へいざなうために』については、本を読むこと自体というのは行われているが、なかなか教科学習の方に結びついていないと感じている。そして、Ⅱ『読書環境の整備』については、市町村立図書館や学校図書館の蔵書の整備、専門人材の配置、情報化への対応というのが依然として厳しい状況が続いている。

（委員長）　図書館利用率もあまり伸びず、授業でもあまり利用されていない。しかし、学力面では伸びた。読書活動推進によって学力が伸びたと言えるのか分かりづらい。データベース化の導入については全国と比べ非常に低い数値である。

（委員）　資料６の 21 番「司書教諭または学校図書館担当職員の配置率」について、資料７、７Ｐには『学校司書（学校図書館担当職員）の配置率』がある。12 学級以上の学校には司書教諭発令義務がある。今後はこの項目の中で司書教諭何％、学校司書何％というように出した方がいいのではないか。

また、学校図書館蔵書のデータベース化については、高等学校が全校完了。限られた教育予算の中で、小・中学校図書館のデータベース化については初期費用や維持費もかかることであり財政措置等なかなか難しいと思う。事業自体は続いていくと思うが、市町村に対してのサポートであるとか、学校司書についても何か協議に出たことや意向等、出たことはないか。

（事務局）　データベース化についてですね。

（委員）　そうです。

（事務局）　データベース化以前の問題として、調べ学習用の図鑑や統計資料等の古い資料を新しい資料に買い換えることが先という学校が多く、データベース化までは協議できていない現状があると聞いている。

（委員）　今、学校の統廃合が進んでいる。この機が一つのチャンスだと思っている。そこで情報提供なり財政措置等のサポートが大事だと感じている。確かに蔵書については達成率が上がっているが、先生方に聞くと蔵書の買い換えとか更新に悩んでいたり、未だにソビエト連邦が載っている地図があるということも聞く。蔵書の更新についても検討課題としての意識は高いのではないか。図書標準の達成率が上がったから良しではなく、その中身も考えていくべきであると感じている。

（委員長）　今日浮かび上がった課題を整理する。

○これから第三次計画を策定するうえで、読書活動という内実をどのように考えたらいいのか。

○その内実はどういう意義と関わり合っているのか。

○その意義は当然ながら子どもたちの将来にかかわることであり、未来の次代社会を見据えて、そ

こを生きる力に結びつける必要がある。そこをどう捉えるか。

○様々なデータ（現象）と読書活動を推進していくことを阻害している根本的な問題を追求していく必要がある。

こういうことを次回にはもう少し詰めて、一つ一つ協議していく必要があると思う。委員の皆さんから論議が必要なことがあれば、出していただき、次回に活かしたい。

（委員）　この成果と課題を見たとき、例えば、何%になったなど数値的なものは分かるが、カリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニング等の考え方が出てくる中で、読書を通してどういう力が育まれていっているのか、育まなければならないのか、そういったところまで第三次計画ではもう一歩踏み込んで検討することが必要ではないか。

（委員長）　そのことは意義にも関わり、読書活動の内実にも関わることである。成果というものはもう少し具体的、そして総体的でいいのではないか。

（委員）　例えばブックスタートについても実施率が 100%になったが、その結果、親子はどんな状況にあるのか、全部はとれなくても、調べてみることによってこの事業の意味というものが分かってくる。また、その意味や効果が分かると普及もしていくだろう。ただ単に実施した割合ではなく、最終的には、この読書の目標にあるように、豊かな心と感性を醸成し、考える力や表現力の育成にどのようにつながっているのかなどの評価も必要ではないか。

（委員長）　その具体的な施策との関連で、どのような効果を実質的に上げていくのか。データ面だけでなく、それはどのように子どもたちの能力の育成にかかわっているのかというところを、厳しく見つめる必要がある。

（委員）　我が町には、小・中１校ずつしかない。同居・連携をして、同じ敷地内に双方がある。その中で、非常に自己肯定感が低いという問題がある。それを解決する一つの方法として、中学生が小学生に対して読み聞かせをする、あるいは小学生が保育園に行って読み聞かせをするという活動を今始めている。そのことによって、自己肯定感や自己有用感というものの高まりが求められるのではないかと考え取り組んでいる。我が町でも来年度、推進計画が更新の時期であり、その点について触れたいと考えている。読書活動の内実、あるいは意義、最終的に生きる力ということを考えたときに非常に大事になってくるのではないかと思っている。

（委員長）　昨今、自己肯定感が大きな問題としてある。具体的な施策として、今、上級生が下級生に対して読み聞かせを行っているというが、それがどのように自己肯定感を生み出しているのかというところも、内実として確かめる必要はある。

（委員）　今、カリキュラム・マネジメントが大事だというように言われており、その PDCA という部分では、どういう成果をめざしていくのかということは、統一感は出せないにしても、そういうものを意識しましょうというところは盛り込む必要はあるのではないかと考える。

（委員長）　先ほど四つの柱を立てたが、カリキュラム・マネジメントについてもどういう尺度で評価していくかということも大きな課題としてあると思った。

（事務局）　本日は、第二次計画の成果と課題を説明させていただきましたが、現象面の結果を羅列に過ぎない感じになっていた。事務局として先ほど委員長様から提案いただいたような観点と合わせて、もう一度しっかり分析・検討等をさせていただき、次の第三次計画にどのように反映していくかというところを次回はお示しする必要があると考えている。

４　閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶